

## 久留米シティプラザ

子どもたちと、まちと、  
文化の明日を元気にする



シティプラザのイベントや舞台裏などを紹介します。



《チクタク》©Julian Aguirre

### ゴールデンウィークはみんなで舞台を

「豊かな感性や生きる力を育むため、子どもに文化芸術に触れる劇場での体験を」。

東京 2020 五輪・パラリンピックに合わせて、「国際子ども舞台芸術・未来フェスティバル」が東京で開かれます。100 カ国以上から子どもの豊かな心の成長を願う文化芸術の専門家が集い、そこで世界中から選び抜かれた舞台作品を上演します。

海外の優れた作品を、久留米の子どもたちにも体験してほしいという思いから、プラザもこの取り組みに参加。4 作品が久留米にやってきます。言葉の無い人形劇「チクタク」や、ラテン音楽にのせたミュージカル「アナのはじめての冒険」などを上演。想像力・創造力を養い、多様性を認め合えるよう、これからもシティプラザは子どもたちにすてきな作品を届けます。詳細はシティプラザのホームページに掲載。

◎久留米シティプラザ

(☎ 0942・36・3000、FAX 0942・36・3087)

## 久留米市美術館

とき・ひと・美  
をむすぶ



市美術館のイベントや所蔵品などを紹介します。



フリデリク・ショパン《エチュードへ長調 作品 10-8、自筆譜（製版用）》1833 年以前 NIFC

### ショパン自筆の楽譜

「エチュード」とは「練習曲」という意味です。ショパンは全部で 27 曲のエチュードを作り、中には「別れの曲」や「黒鍵」「英雄」「木枯らし」といった名前が親しまれるものもあります。練習曲というと簡単なようですが、ショパンのエチュードは演奏上の課題がたくさん盛り込まれた難曲ばかり。1833 年に 12 曲が作品 10 として出版されましたが、名ピアニスト・リストでさえ初見で弾くのは難しく、隠れて練習したのだとか。後に披露されたリストの演奏は素晴らしく、ショパンはこの作品 10 を彼に献呈しました。

写真は作品 10 の 8 番で、ショパンが書いた自筆譜です。清書ですが、少しだけ最後の手直しの跡も。ポーランドの国立ショパン研究所の博物館で保管されている貴重な楽譜や手紙が、国交樹立 100 年を記念して特別に来日しています。 【学芸員：佐々木奈美子】

◎久留米市美術館

(☎ 0942・39・1131、FAX 0942・39・3134)

ショパン  
200 年の肖像

3月22日①まで



人権の花「ひまわり」

シリーズ

じんけんの絆

46

## パラスポーツが社会との接点

事故による脊髄損傷で下半身不随。岩崎満男さんはそこから奮起し、92年に車いすテニスのパラリンピック日本代表に。パラスポーツ(※)を通して感じる、社会に必要なことを聞きました。

### 目標をくれたパラリンピック

私は 23 歳の時にスキーで転倒して脊髄を損傷、両足にまひが残りました。もう体を動かさないと一時は絶望しましたが、パラスポーツが希望を与えてくれました。リハビリで車いすバスケットを始めて 2 年目、友人に誘われてオランダ開催のパラリンピックを見に行きました。障害を感じさせず、純粋に競技に打ち込む姿に衝撃を受け、「ここに立ちたい」と目標を持ってたんです。それから本格的に練習に励み、東京代表や強化指定選手へとステップアップ。その後、車いすテニスに転向し、正式種目になった 92 年バルセロナ大会で日本代表に。パラスポーツは私と社会の接点になってくれました。

### 配慮でなく排除

パラスポーツは誰でも参加できるのに、実生活では障害があると参加できない場面が多い。違いは配慮がルールとなっているかどうか。まだ社会全体として、配慮の意識が根付いていない

いのだと思います。

例えば、「危ないから横で見ている」と言われることがあります。障害だけを理由に参加できないのはあまりにつらい。人はトラブルなども含め、いろんな経験から生きる力を学びます。本人の意思を無視した配慮は、目標設定や成長の機会を奪ってしまうのです。これは排除と言わざるを得ず、社会の責任だと思っています。本人が選択できるように、可能な範囲で条件を整えるのが合理的配慮。これは、外国人や高齢者に対しても同じで、誰にでも当てはまること。誰にも優しい社会が共生社会というものですよね。

### 触れて変わる意識

パラリンピックをきっかけに、東京では施設のバリアフリー化が進んでいます。併せて「心のバリアフリー」も大事で、パラスポーツは良い接点になると思います。数年前、市内の総合型地域スポーツクラブにパラスポーツの教室ができ、私もそこに関わっています。そこは、障害の無い子どもたちが「人はそれぞれに違いがある」ことを感じられる場。じかに接すると意識が変わり、気付かなかった部分に気付くようになるのです。

私はこれからも、パラスポーツに多くの人に関われる仕組みをつくっていきます。今、社会に足りないものを感じる機会を増やしたいから。まずは今年の東京パラリンピック。多くの人に楽しんでほしいですね。

◎障害者福祉課

(☎ 0942・30・9035、FAX 0942・30・9752)

昭和30(1955)年生まれ。西町在住。日本車いすテニス協会理事・副会長。



※広く障害者スポーツを表す言葉。「parallel-sports (もう一つのスポーツ)」という意味も持っています